

懐かしさの生起要因と個人差—自伝的記憶に基づく検討—

池田寛香

要約

本論文は、自伝的記憶のモデルに基づいて、過去に対する感傷的な思慕である「懐かしさ (nostalgia)」を生起させる要因およびその個人差について検討することを目的とした。多くの先行研究は懐かしさの心理的機能を明らかにすることを目的としていたため、懐かしさの生起要因それ自体を明らかにする研究は少ない。特に、記憶想起がどのように懐かしさの生起に貢献しているのかはほとんど検討されてこなかった。

第1章「懐かしさと自伝的記憶に関する研究のレビュー」では、懐かしさの定義と歴史、構成要素などの背景知識について概観した。さらに、懐かしさの喚起法、測定法について概観した上で、懐かしさの生起要因を解明するために、自伝的記憶研究の知見を取り入れることが必要であると問題提起を行った。本論文では、懐かしさの生起を支える記憶を明らかにするにあたって、懐かしさと記憶システムの対応を示した仮説モデル（川口, 2011, 2014; 楠見, 2014）に着目した上で、楠見（2014）のモデルを主な検討対象として議論を進めた。この仮説モデルは Tulving（1985, 2001）のモデルをベースとしたものであり、エピソード記憶が個人の過去に基づく自伝的懐かしさの基盤となり、意味記憶は文化的知識に基づく文化的懐かしさの基盤となり、潜在記憶がそれらの懐かしさ感情の生起を支えることを示している。しかし、自伝的懐かしさに関与する出来事の中には、反復接触（Kusumi et al., 2010）を伴う出来事など、個人的（自伝的）な意味記憶に分類されるものも含まれる。つまり、エピソード記憶・意味記憶の間に位置する、自己関連性が高い意味記憶にも着目する必要があると考えた。よって本論文では、自伝的記憶を構成するエピソード記憶と意味記憶（個人的意味記憶）の双方が懐かしさの生起を支えていることを検討し、それぞれの懐かしさの個人差についても検討することで、既存の仮説モデルの拡張を行った。

第2章「研究1: 記憶の再認時に生じる懐かしさの検討」では、川口（2011, 2014）、楠見（2014）による既存の仮説モデルの実証のために、記憶の再認時に「いつ・どこで・何

をしたのか視覚的イメージを伴って思い出せる」という想起意識が生じているのか、それとも「経験はあるが、細かいことは思い出せない」という既知意識が生じているのかを Remember/Know 課題を改変して分類し、その意識・再認の状態と懐かしさの関連性を検討した。大学生・大学院生 37 名を対象とした実験の結果、想起意識を伴う再認が行われたときの懐かしさは、既知意識を伴う再認が行われたときよりも短い時間で生起し、感情強度も高いことが示された。この結果は、懐かしさ生起の強度およびスピードが、刺激に関連する記憶の再認プロセスによって異なることを示すとともに、川口（2011, 2014）、楠見（2014）のモデルにおけるエピソード記憶・意味記憶のフレームワークが懐かしさの生起状況を説明することを示唆するものであった。

第 3 章「研究 2: 懐かしさを生起させるエピソード記憶と個人的意味記憶」では、エピソード記憶・意味記憶の間に位置する個人的意味記憶をより連続的に捉える personal semantics のモデル（Renoult et al., 2012）に基づき、記憶のカテゴリーを細分化し、既存の仮説モデルを拡張した。この研究 2 は、再認・検索する自伝的記憶の抽象度と現在からの時間の距離が懐かしさの生起に与える影響を明らかにすることを目的とした。オンライン形式で実施した実験 1 では、大学生 34 名を対象として、3 時点（小学 1-3 年生時、高校生時、1 ヶ月前）における一度きりの出来事、繰り返される出来事、自伝的事実（友人名・習慣）、自己知識（社会的役割・性格）の想起を求め、回答を収集した。収集した回答に基づいて刺激文を作成し、1 週間後の 2 回目の実験で呈示した。呈示後は、快さや覚醒度、懐かしさなどの評定を行うよう求めた。オンライン形式で実施した実験 2 では、大学生 55 名を対象として、3 時点（小学生時、高校生時、1 ヶ月前）における一度きりの出来事、繰り返される出来事、自伝的事実（学校名・友人名）、自己知識（社会的役割・性格）に相当する記憶の想起と評定を求めた。実験 1, 2 の分析の結果、特に強い懐かしさを伴う記憶の種類は、参照する時期によって異なることが明らかになった。小学生時の記憶を想起する条件では、繰り返される出来事と自伝的事実が自己知識よりも強い懐かしさを生起させたが、高校生時の記憶を想起する条件では、一度きりの出来事と繰り返される出来事が他の 2 つの記憶よりも強い懐かしさを生起させた。この結果から、エピソード記憶だけではなく、個人的意味記憶も懐かしさの生起を支えていることが示唆された。

第 4 章「研究 3: 懐かしさ生起における自伝的記憶の種類の影響—パターン分離の調整効果に着目して—」では、研究 2 の結果をさらに詳細に検討するために、海馬機能の個人差の調整効果を検討した。研究 2 では、一度きりの出来事と繰り返される出来事間に一貫した懐かしさの強度差はみられなかった。この理由を探るために、繰り返される出来事

が、類似した一度きりの出来事の集合体であることに着目し、類似した出来事を分離する能力の高さが懐かしさの強度に関連しているのかどうかを検討する必要があると考えた。よって研究3は、異なる種類の自伝的記憶（一度きりの出来事、繰り返される出来事）の想起時に生じる懐かしさの強度が、類似した記憶表象の干渉を避けるための海馬の機能であるパターン分離によって調整されるのかを検討し、繰り返される出来事の想起時に生じる一度きりの出来事の想起頻度がパターン分離と関連しているか検討することを目的とした。オンライン形式で実施した実験1,2では、それぞれ成人参加者102名（23-57歳）、165名（20-59歳）を対象として、3時点（10年前、5年前、2週間前）における一度きりの出来事、繰り返される出来事の想起と評定を求めた。この評定データに基づき、懐かしさと感傷度の評定の平均値を「感傷を含む懐かしさ」の強度であると定義した。10年前、5年前の条件のデータを対象とし、感傷を含む懐かしさの強度を従属変数とした線形混合モデルによる分析を行ったところ、自伝的記憶の種類の主効果が有意であったが、自伝的記憶の種類とパターン分離の交互作用は非有意であった。また、繰り返される出来事の想起時に一度きりの出来事を抽出し想起する頻度は、パターン分離と相関しないが懐かしさの強度とは正に相関していた。これらの結果から、パターン分離は、自伝的記憶の種類が懐かしさの強度に及ぼす効果を調整しないこと、繰り返される出来事の想起を手がかりとした詳細な一度きりの出来事の想起にも関連しないことが示された。

第5章「研究4: 懐かしさの生起を支える一度きりの出来事と繰り返される出来事：研究2,3の追試研究」では、研究2,3の結果の違いを説明しうる要因を検討した。研究2,3は、さまざまな自伝的記憶と懐かしさの強度の関連性を検討したが、一度きりの出来事・繰り返される出来事の懐かしさの強度の差異については、一貫した結果が得られていなかった。研究2では、特定の大学に通う大学生を対象として小学生時、高校生時の想起を求めたところ、小学生時の一度きりの出来事が繰り返される出来事よりも有意に低い懐かしさ強度を伴うという結果（実験1）と、両者に有意差がないという結果（実験2）が混在していた。その一方で、研究3では、全国の成人（20-59歳）を対象として5,10年前の想起を求めたところ、どの時期においても、一度きりの出来事が繰り返される出来事よりも感傷を含む懐かしさをより強く生起させるという結果が得られていた（実験1,2）。これらの結果の違いを説明しうる要因として、参加者の属性と想起する時期が挙げられる。よって、研究4では、一度きりの出来事と繰り返される出来事の懐かしさの強度を比較する際に、参加者の年齢と想起する時期（学生時代）を統制し、結果の一般化可能性を確認することを目的とした。オンライン形式で実施した実験1,2では、それぞれ全国の大学生の参加者81名と、学生ではない成人（25-56歳）の80名を対象として、3時点（小学生時、高校生時、2週間前）の一度きりの出来事、繰り返される出来事の想起と評定を

求めた。この評定データに基づき、懐かしさと感傷度の評定の平均値を「感傷を含む懐かしさ」であると定義した。小学生時、高校生時の条件のデータを対象とし、感傷を含む懐かしさの強度を従属変数とした線形混合モデルによる分析を行ったところ、実験1では自伝的記憶の種類の主効果が非有意であり、実験2では有意であった。研究2,3,4の結果を統合するために、懐かしさ・感傷を含む懐かしさにおける、一度きりの出来事・繰り返される出来事間の強度の差（変化）を標準化した効果量を用いたミニメタ分析を行った。分析の結果、遠く離れた過去（小学生時または10年前）を想起する条件では、一度きりの出来事と繰り返される出来事の方に懐かしさの強度の有意差はみられなかったが、感傷を含む懐かしさの強度は一度きりの出来事の方が有意に高かった。中程度に離れた過去（高校生時または5年前）を想起する条件では、一度きりの出来事の方が繰り返される出来事よりも懐かしさと感傷を含む懐かしさの双方の強度が有意に高いという結果が得られた。

第6章「研究5：懐かしさに自己不連続性が与える影響—Sedikides, Wildschut, Routledge, & Arndt (2015) の概念的追試—」では、自己不連続性と懐かしさ傾向、状態懐かしさの関連性に焦点を当てた。研究1-4では記憶想起を通じた懐かしさの生起に焦点を当てたが、研究5では心理的脅威が生じるような心的状態の変化が懐かしさを生起させるプロセスに焦点を当てた。Davis (1979) は、懐かしさは、現在の恐れや不安に由来する主観的な不連続性によって生じると主張している。この不連続性は、心理学研究では「自己不連続性」と呼称される (e.g., Milligan, 2003)。自己不連続性は、変化を認識しながらも自身を同じ人間として捉えられる自己連続性 (Robinson & Freeman, 1954) が脅かされた状態であり、喪失体験との関連がある (Milligan, 2003)。Davis (1979) の主張を心理学的手法を用いて実証したのが Sedikides et al. (2015) であり、ネガティブな自己不連続性が日常生活で懐かしさを感じる傾向（特性レベルの指標）と相関し、状態懐かしさの喚起度（状態レベルの指標）を高めることを示した。しかし、大学生や一般の集団を対象とした追試研究はその後報告されていない。特に自己不連続性は自己や自伝的記憶との関連性が高いと考えられるため、特性・状態レベルの懐かしさと自己不連続性の相関関係と因果関係を追試することによって、自己不連続性が自伝的記憶想起を促進し懐かしさを生起させる（もしくは高める）という一連のプロセスが存在する可能性を示すことができると考え、Sedikides et al. (2015) の概念的追試を行った。オンライン形式で実施した調査では、19-70歳の105名を対象として、様々な生活の変化（例えば、睡眠習慣の変化、食習慣の変化、住居の変化）の有無、変化がある場合にはそれがポジティブ、ネガティブのどちらであるかの回答を求めた。また、その変化に由来する自己不連続性の程度の評定を求めるよう手続きを修正した。その結果、ネガティブな生活の変化の多さと懐かしさ傾向

の相関は非有意であったが、生活の変化に由来する自己不連続性の程度と懐かしさ傾向は有意な正の相関を示した。ただし、年齢を統制すると後者の相関はわずかに低下し非有意になった。探索的分析により、懐かしさ傾向はポジティブな変化ではなくネガティブな変化に由来する自己不連続性の程度とのみ正に相関することが示された。オンライン形式で実施した実験 A では大学生 93 名に対して先行研究と同じ材料を用いて、実験 B では 20-68 歳の 94 名に対して新たな材料を用いて、ネガティブな自己不連続性、ポジティブな自己不連続性、自己連続性のいずれかを誘導するための実験操作を行った。しかし、この自己不連続性・自己連続性の条件の主効果は非有意であり、誘導された自己不連続性は状態懐かしさの喚起度に影響を与えなかった。これらの一連の結果から、ネガティブな自己不連続性は懐かしさ傾向と関連するが、状態懐かしさの喚起度を高めないことが示された。

第 7 章「研究 6: 特性レベルの自伝的懐かしさ・文化的懐かしさと幸福感の変化との関連-3 時点の縦断調査による検討-」では、自伝的、文化的懐かしさの生起要因のリストに対する反応の個人差に焦点を当てた。先行研究は、特性レベルの自伝的懐かしさ傾向が幸福感と関連すること (e.g., Baldwin et al., 2015)、自伝的懐かしさ傾向が高い個人は、そうでない個人よりも懐かしい回想を行うことによるポジティブな介入効果を得られること (Layous et al., 2022) を示している。しかし、日常生活における懐かしさ傾向の経時的変化と幸福感の関連性については不明な点が多く、また、自伝的・文化的懐かしさ傾向の比較を行った研究は見当たらない。よって研究 6 は、3 時点のパネルデータを用いて、特性レベルの懐かしさ指標を自伝的懐かしさと文化的懐かしさの側面から縦断的に検討し、人生満足度と協調的幸福感との関連性を検討した。このパネルデータでは、1 時点目においては全国の 16-90 歳の 1421 名 (3 時点目までの完全データは 204 名) が分析対象となった。ランダム切片交差遅延パネルモデルによる分析の結果、個人間レベルでは、自伝的懐かしさと協調的幸福感、文化的懐かしさと人生満足度がそれぞれ関連していた。そして、2 時点目の文化的懐かしさの個人内変動が、3 時点目の人生満足度の個人内変動と正に関連していた。しかしながら、自伝的懐かしさの個人内変動においてはそのような効果がみられなかった。

第 8 章「総合考察」では、全ての研究で得られた結果を統合し、考察を行った。まず、研究 1-4 で得られた結果に基づき、自伝的記憶を構成するエピソード記憶と意味記憶の双方が懐かしさの生起を支えていることと、既存の仮説モデルの拡張可能性について論じた。そして、研究 5 の結果からは自己不連続性が懐かしさを生起させるとはいえないが、研究 2, 3, 4 の結果から、出来事の連続性 (不連続性) は懐かしさの生起に関わってい

ると考察し、ライフタイムピリオドの変化や生活の変化の認識が懐かしさの生起要因である可能性について論じた。そして、個人差については、研究3における類似した記憶表象の弁別能力は調整効果を持たないこと、研究3,4における自伝的記憶の想起特性のうち、再体験感が特に懐かしさの強度と関連すること、研究6における自伝的・文化的懐かしさの生起要因のリストへの反応の結果を整理した上で議論を行った。